

5

10

15

**第3期**  
**上サロベツ**  
**自然再生**  
**普及行動計画**

E ☆ S 最終案 180221 版

20

25

30

平成30年 月  
上サロベツ自然再生協議会再生普及部会  
エコモ一☆サポ一ター

35

# 1. はじめに

5 サロベツ湿原は、日本の代表的な泥炭湿原のひとつです。かつては、南北27km、東西8km、面積14,000haにも及び、釧路泥炭地や石狩泥炭地に次ぐ泥炭湿原でした。戦後農地化が進み、湿原は6,700haにまで減少しましたが、現在でも釧路湿原や別寒辺牛湿原に次ぐ第3位の面積を誇り、高層湿原としては有名な尾瀬をもしのぐ日本最大のものです。マガンやオオヒシクイをはじめ多くの渡り鳥がやってくる貴重な湿原で、ラムサール条約に登録された国際的にも価値が高い湿原とされています。

10 豊富町の農業の歴史は、兜沼地区に明治36年（1903年）に岐阜団体が入植し、サロベツ原野の開拓を始めたのが始まりです。開拓から100年あまり、先人たちは、寒い冬や春の雪解けによる河川の氾濫など、厳しい自然と闘ってきました。その一方で、サロベツ湿原の広大な景観や、湿原に春から秋にかけて数多く咲く花々、訪れる渡り鳥たちを大切に見守り、慈しみ育ててきたふるさとでもありました。

15 昭和40年以降、本格的な開拓が進みサロベツ湿原は急速に減少しましたが、一方で、貴重な湿原を守るべきだという声が広がり、湿原として残すところ、農作地として活用するところ、その他活用するところに分けて、保全と利用を図ることになり、昭和49年に利尻礼文サロベツ国立公園に指定されました。

20 国立公園に指定され、保護が図られることになったサロベツ湿原ですが、それまでに行われた放水路掘削や河川改修などの影響は大きく、指定後も湿原の乾燥化が進み、草花が咲き誇った高層湿原では、ササ群落が浸食して可憐な花が見られなくなるなどの環境の変化が進みました。かつては大きな水面を讃えたパンケ沼では湖面が縮小し、湖岸ではたくさんのゴミが見つかります。砂丘林にあったいくつかの湖沼では、いつの間にか水位が低下し陸地になってしまいました。一方、従来は利活用する湿原として泥炭の採掘が行われていた場所では自然の価値が見直されたこともあり採掘は終了し保護が図られることになりましたが、開発中に生じた裸地はそのまま残され、荒廃した自然の復元が課題になってきました。

25 平成17年（2005年）、このような状況にある上サロベツ湿原を、行政や地域が一丸となって保全再生していくために、「上サロベツ自然再生協議会」が立ち上がりました。全国各地で設立された自然再生協議会では、自然を再生しようという事業者を中心に、地元行政機関や地域住民、学識者、NPOなどから構成されています。上サロベツ湿原でも基本的には変わりませんが、大きな違いは、この地域に根づいて暮らしを営んできた農家の方々も自然再生の主役として「湿原と共生する農業の振興」という観点で積極的に参加していることです。サロベツでは残された湿原の保全のため、農家の方々が計25haにも及ぶ農地を提供し緩衝帯が設けられましたが、全国的にも珍しい取組で、このことは農村工学会賞（上野賞）を受賞するという荣誉に輝きました。さらに、サロベツに関わるすべての人によって湿原と共生する地域づくりを図ろうという「サロベツ・エコモー・プロジェクト」の取組により、幅広い方々と協働してきました。上サロベツ自然再生では、このような地域への思いと、行政による自然再生事業を一对の両輪として、この10年あまりの

間、自然再生に取り組んできたところです。

今回改定する普及行動計画では、これまで 10 年あまりの活動を踏まえ、今後の普及活動の新しい方向性を定めるものです。

## 2. 経緯と課題

### (1) 経緯

平成 17 年 1 月「上サロベツ自然再生協議会」が設立されました。主な自然再生事業は、北海道開発局や北海道地方環境事務所、北海道森林管理局などの行政機関による保全対策事業が中心ですが、自然再生を円滑に進めるには、地域をはじめとする多くの方の理解と協力が必要という考えから、協議会の中に「再生普及部会」が設置されました。再生普及部会では、「サロベツ湿原の適正な保全と利用推進並びに自然再生を活用した環境教育、市民参加、情報の発信及び提供等に関する事項」について協議すると定められています。

再生普及部会では、平成 19 年 5 月に「上サロベツ自然再生普及行動計画」（第1期行動計画）を策定し、再生普及活動を開始しました。第1期普及行動計画では、サロベツ自然再生に対して、自発的に普及活動に参加する方々がいることを前提に、その活動を支援していくというのが基本的な考え方です。この自発的な普及活動を「サロベツ・エコモー・プロジェクト（以下、「エコモー・プロジェクト」という）」、この活動の実施者を「エコモー☆メンバー」と名付け、登録する仕組みができました。平成20年より、連携支援として「研修交流会」（現在の「エコモー☆交流会」）を開催しています。

#### 第1期普及活動（平成19年～平成24年）の仕組み

- ・「湿原の再生」、「農業の振興」、「地域づくり」のために必要な住民参加と環境教育を推進する。
- ・プロジェクトの推進者は、地域の有志。自発的に取り組むことを期待し、プロジェクトの手がかりとして「サロベツ文化づくりのための上サロベツにおける7つの行動」を提示。
- ・普及活動支援ワーキンググループを設置し、個々のプロジェクトの活動を支援する。
- ・普及行動計画の役割
  - 地域主体の活動を支援「活動支援」
  - 活動の継続を支援「継続支援」
  - 活動する団体・人をつなげることを支援「連携支援」

第1期の普及活動を展開する中で、地域住民の自然再生への理解を深めていくことが必要だと考えられるようになってきました。平成22年からは自然再生への理解を深めてもらうため、一大イベントである豊富町ホッキまつりに参加して、エコモー☆パークを開催し普及に努めてきました。平成24年6月、このような状況を踏まえ第2期普及行動計画を策定し現在に至っています。第2期普及行動計画では、活動支援ワーキンググループを発展的に解消して新たに「エコモー☆サポーター」を結成しました。また、同年秋にはサロベツ湿原センターにおいて第1回サロベツ・エコモーDayを開催して、普及活動の場を増やしたところです。

## 第2期普及活動（平成25年～現在）の仕組み

- 5 ・上サロベツの自然再生にかかわる活動を「サロベツ・エコモー・プロジェクト」と位置づける。
- ・プロジェクト実施者を「エコモー☆メンバー」という。
- ・普及行動計画の3つの役割を提示
  - 自然再生を伝える
  - 人や団体のつながりをつくる
  - 地域への思いを育てる
- 10 ・普及活動支援ワーキンググループを発展解消し、「エコモー☆サポーター」を設置
- ・活動の振り返り方法として、PDCA手法を導入

## 《再生普及活動年表》

15	平成15年 1月 1日	自然再生推進法施行
	平成17年 1月19日	上サロベツ自然再生協議会設立
	平成18年 2月 2日	第1回再生普及部会開催
		上サロベツ自然再生全体構想の策定
	平成19年 5月17日	上サロベツ自然再生普及行動計画の策定
20	平成19年 8月～	普及活動支援ワーキンググループ活動開始
	平成20年 4月～	サロベツ・エコモー・プロジェクトの開始
	平成21年 3月 7日	研修報告会開催
		(その後「エコモー☆交流会」として年1回開催)
	平成22年 7月25日	第1回エコモー☆パーク開催
25		(以降毎年ホッキまつりにおいて開催)
	平成24年 6月21日	第2期上サロベツ自然再生普及行動計画策定
		エコモー☆サポーター活動開始(普及活動支援WGの発展解消)
	平成24年10月20日	第1回エコモーDay開催(以降毎秋に開催)
	平成29年 3月 9日	第17回再生普及部会開催
30		エコモー☆サポーター会議において第2期上サロベツ普及行動計画の見直し開始を承認
	平成30年 月 日	第3期上サロベツ自然再生普及行動計画策定

## (2) 普及行動計画取組の成果

### 35 ①自然再生を伝える

エコモー☆サポーターでは、平成22年からのエコモー☆パーク、平成24年からのエコモーDayをはじめ、エコモー・プロジェクトの巡回展など、自然再生を伝えるために様々な取組を行ってきました。平成27年のエコモー☆パーク来場者へのアンケートでは、会場を訪れた豊富町民のうち8割もの方が上サロベツ自然再生について知っていると答え

ており、普及活動の成果が上がってきています。

## ②エコモー・プロジェクト

平成 20 年以降、登録されたエコモー・プロジェクト数は年々増加しています。

5



図：エコモー・プロジェクト登録数の推移

### (3) 普及活動における課題

①「自然再生を伝える」とは

10 第2期普及行動計画では、「自然再生を伝える」ことが普及活動の役割とされました。ところで、この伝えるべき「自然再生」について、エコモー☆サポーターはどのように考えてきたでしょうか。

15 上サロベツ自然再生協議会は、上サロベツ湿原の自然再生を目的に設立され、上サロベツ自然再生全体構想では、自然再生の目標として「湿原の自然再生」「農業の振興」「地域づくり」の3つを掲げました。この目標は「湿原と共生する農業の振興」や「湿原と共生する地域づくり」を意味していたはずですが、再生普及活動においては「湿原との共生」にはこだわらず、もっと広い「農業の振興」や「地域づくり」を含むものとしてとらえてきました。さらに、エコモー・プロジェクトに取り組むきっかけとして「サロベツ文化づくりのための7つの行動」を示してきましたが、それ自体が「自然再生」の普及活動そのものとして扱われてきたところがあります。

20 一方、エコモー☆サポーター活動においては、「自然再生を伝える」ことについて、サ

ロベツ湿原で行われている自然再生事業や様々な取組に対する地域住民への周知や理解を深めることを目標に取り組みを進めてきました。その結果、エコモー☆パークに来訪した豊富町民の認知度は80%を超えるなど一定の成果を上げてきました。ただし、ホッキまつり全体の参加者数から見ますと、エコモー☆パークの来場者数はごく一部です。もともと自然再生に関心があった方々には足を運んでもらえても、それ以外の町民にどのように伝えていくかが課題です。さらに、豊富町民以外に限ってみると認知度は3割あまりにとどまっています。

ひとくちに「自然再生を伝える」といっても、サロベツ湿原の自然史や現状と課題、個々の自然再生事業、地域での活動の紹介など、様々な分野のことが入っています。「自然再生を伝える」ことについて、エコモー☆サポーターが同じ認識の下で取り組んでいくことが必要です。

## ②エコモー・プロジェクト

エコモー・プロジェクトは、上サロベツ自然再生とサロベツに関わる人をつなげる地域活動です。これまでの普及行動計画では、自発的な活動を基本に、その活動を始める手がかりとして「サロベツ文化づくりのための上サロベツにおける7つの行動（サロベツ文化づくりのための7つの行動）」を示しました。

最初は、自然再生を意識した自発的な活動ばかりでしたが、より裾野を広げるために、サロベツに関わる「7つの行動」であれば積極的に登録を呼びかけていきました。その結果、多くのエコモー☆メンバーやエコモー・プロジェクトが誕生したものの、「上サロベツ自然再生」のつながりが薄いと感じられる活動も数多く含まれるようになりました。エコモー・プロジェクトに登録して終わりというものも少なくありません。

せっかく登録されたエコモー・プロジェクトなので、自然再生とのつながりを確認していく必要があります。

## ③エコモー☆サポーター

エコモー☆サポーターは、上サロベツ自然再生協議会再生普及部会の中に設けられたものです。関係行政機関、NPO、個人から構成されていますが、参加動機は、自ら行う自然再生事業の普及活動、団体における規約や定款との合致、サロベツへの思いなど様々です。エコモー☆サポーターの基本的な役割は、普及活動にかかる協議や連絡調整の場で、イベントの開催等については、それぞれの構成員がそれぞれの立場のできる範囲で協力し合う形で取り組んで来ました。

この活動は、活動支援ワーキンググループから通算して10年あまりが経過しましたが、上サロベツ湿原自然再生を取り巻く環境は大きく変わってきました。現在、いくつかの自然再生事業はその目的を達しつつあります。新しいエコモー・プロジェクトが増える一方で、消えていく活動もあります。エコモー☆サポーターのうち、行政機関に所属するサポーターは定期的に担当者が異動するため、それぞれの機関の所掌事務を越えた新しい発想や長期にわたった取り組みを続けることは困難です。普及活動は回数を重ね定期的な行事になることで安定的に開催できるようになりましたが、一方でマンネリ化を招き、活力を維持していくことがむずかしくなっています。

自然再生は息の長い取組が必要です。そのためには地域が活動の中心となることや、新しい人たちが参加しやすい仕組みを作ることが、求められています。



### 3. 第3期普及行動計画における基本的な考え方

#### (1) 自然再生普及行動計画の位置づけ

5 自然再生を普及していくことは、上サロベツ自然再生を進めていく上でとても大切です。再生普及部会では「サロベツ湿原の適正な保全の推進並びに自然再生を活用した環境教育、市民参加、情報の発信及び提供に関する事項」を担当してきました。普及活動を進めるにあたって基本的な方針を定めたものが、自然再生普及行動計画です。

#### (2) 目標

10 上サロベツ自然再生は、「上サロベツ湿原の自然再生」という目的に向かって取り組まれています。そのための「湿原の自然再生」「農業の振興」「地域づくり」の3つ目標を定め、普及行動計画では「自然再生を伝える」「人や団体のつながりをつくる」「地域への思いを育てる」という3つの役割を示しました。目標や役割は、目的達成のための手段としてとても重要なものです。ところが、目的達成のための手段であったことが、いつの  
15 まにか目的にすり替わってしまうことが少なくありません。課題としてあげた「自然再生を伝える」ことについても、本来は「上サロベツ湿原を再生する」ための手段にしか過ぎませんが、「自然再生を伝える」ことが目的のように扱われてきました。

第3期再生普及行動計画を策定するにあたっては、これまでの活動を踏まえつつ、誰もが同じ目標をイメージし共有できるよう、わかりやすくシンプルな目標設定とします。

20

#### 目標① サロベツを好きな人を増やします

サロベツの自然がどのような状況にあって、それを再生するためにどんなことが行われているかということを知ってもらうことは、自然再生を進める上でとても大切なことです。しかし、多くの人にとって、説明を受けても自分のこととして受け止め、自然再生活動に  
25 参加するまでには至らないのが現実です。

誰もが最初はサロベツのことは知りません。サロベツで生まれ育った人でも、家族や学校、地域社会の中でサロベツのことを体験的に学んでいきます。サロベツ以外で生まれ育った人は、本やテレビなどでサロベツを知ったり、たまたま北海道旅行中にサロベツに出会ったりと、誰もが何かのきっかけがあったはずです。一面のエゾカンゾウに遭遇して、  
30 また来たいと思うかもしれません。サロベツが気になって何度かサロベツを訪れているうちに、きっとサロベツを好きになることでしょう。その中で昔あった高山植物の花畑をいまは見ることができなくなったことを知れば、サロベツの抱えている問題に行き当たることでしょう。そして、何かサロベツのために手伝えることはないかという考えになるのではないのでしょうか。

35 一人一人がサロベツを好きになり、その人がサロベツへの思いを重ね、また新たに他の人にも伝えることを繰り返すことで、サロベツファンが増えていくことでしょう。その積み重ねが、サロベツを次の世代に伝える大きな力になるに違いありません。

## 目標② サロベツを次の世代に伝えます

サロベツを次の世代に伝えるということの中には、いまのサロベツをそのまま残すのではなく、サロベツの良かった風景が昔話にならないように自然を保全・再生することや、祖父母やさらにそのご先祖様がサロベツで培ってきた湿原との共生の歴史や思いを伝えていくことも含まれています。自然再生というとむずかしく考えがちになりますが、サロベツを次の世代に伝えるため、一人一人ができることに取り組んでいけるようになること、それが普及活動における自然再生活動そのものです。

ここでは、「上サロベツ湿原」ではなく、あえて「サロベツ」としました。上サロベツ自然再生協議会が自然再生の対象としている地域は、「豊富町内の国立公園であるサロベツ湿原」ですが、多くの人に好きになってもらうのは、上サロベツ湿原だけに限らず、サロベツ全体でも構いません。サロベツには、湿原以外にも、炭鉱の歴史や温泉、周氷河地形などたくさんの魅力があふれています。湿原に限定しない方が、より多くの魅力を発信し、多くの人にサロベツのファンになってもらうことができるでしょう。

ところで豊富町では、町民総出で稚咲内海岸の清掃活動を行っています。稚咲内海岸の漂着ゴミをいくら清掃しても、上サロベツ湿原の乾燥化を食い止めることはできません。しかし、清掃を通じて、地域の美化活動の大切さを知ることができれば、次に湿原で同じような清掃活動の機会や再生のためのメニューがあったら、きっと参加しようと思ってくれるに違いありません。

また、新たな切り口からの活動を加えることで、これまではつながりを持ちにくかった人や団体ともスムーズな協力が行えることでしょう。新たな協力関係を通じて、自然再生に取り組むことの意義について知ってもらうきっかけになるほか、活動のバリエーションが広がることで、参加機会が増えることも期待されます。

### (3) サロベツ・エコモー・プロジェクト (エコモー・プロジェクト)

これまでの普及行動計画では、サロベツに関わるすべての人が、自然再生普及活動を担うことを目標に、「サロベツ・エコモー・プロジェクト」の推進に取り組んできました。第3期普及行動計画においても、エコモー・プロジェクトは、普及活動の中心として位置づけます。

#### サロベツ・エコモー・プロジェクトとエコモー☆メンバー

「エコモー」とは、「自然」と「農業」との共生を目指して、エコ (ecology) と牛の鳴き声 (Moo) をあわせたサロベツにおける造語です。これまで、上サロベツ自然再生と、地域に暮らす人、サロベツを訪れる人、サロベツを思う人をつなげる活動を「サロベツ・エコモー・プロジェクト」として位置づけています。第3期普及行動計画においては、改めて、このような活動を核にした「サロベツを好きになるための活動」と定義します。また、エコモー・プロジェクトの担い手を「エコモー☆メンバー」とします。

ただし、第3期普及行動計画では、「サロベツ文化づくり7つの行動」にかわり、新しい目標を踏まえた「サロベツを好きになるための活動」や「サロベツを次の世代に残す活動」として展開することとします。ここでは、サロベツへの関わり方の違いにより、4つのカテゴリーに分類します。

5

#### 【カテゴリー1（サロベツに出会う）】

サロベツ湿原を全く知らない人、サロベツという名前を知っていても行ったことがない人、豊富に住んでいながら湿原には何年も行ったことがない人、こんな人たちにまずはサロベツ湿原のことを知ってもらい、サロベツ湿原に興味を持ち、行ってみようと思うことから始まります。

10

例：サロベツ湿原を舞台にしたドラマや映画

湿原をフィールドとしたマラソン

『北海道しめっちカルタ』

15

湿原センターでの催し（コンサート、写真展など）

折り紙、紙芝居、エッセイ、フォトグラフ など

#### 【カテゴリー2（サロベツを体感する）】

サロベツ湿原に実際に訪れ、自然を体感することはサロベツへの思いを育む大きなきっかけとなります。誰でも好きになったことはもっと知りたいと思うでしょう。サロベツに興味を持った人に、次はサロベツを好きになってもらいたい。そのためには、サロベツをたっぷり体感し、楽しんでもらうことが大切です。

20

例：バードウォッチング

25

フラワーウォッチング

写真教室

写生会

句会

サロベツ川のカヌー

30

サイクリング

湿原のものを素材にしたクラフト

サロベツ牛乳を使った料理づくり

など

#### 【カテゴリー3（サロベツを理解する）】

35

好きになったことへの理解を深めていけば、そこにある問題にも自然と気がつくことでしょう。サロベツ湿原への理解を深めてもらうことが、自然再生への理解にもつながってきます。

例：バックヤードツアー

40

『なまら！！サロベツ∞クラブ』

自然再生事業地の見学会  
自然再生クイズラリー（エコモー☆パーク、エコモー Day）  
講演会 など

5 【カテゴリー4（サロベツのために行動する）】

サロベツを好きになり、サロベツの抱える問題に気がついた人は、きっとサロベツのために何かできることはないか、少しでも役に立ちたい、そんな思いになっていくのではないのでしょうか。そんな思いが、サロベツ湿原の再生への行動につながっていきます。

10 例：自然再生事業地のモニタリング活動への参加

裸地の復元作業  
『サブレンジャー』  
ボランティア活動  
ササ除去作業  
外来種除去作業 など

15

これまで登録されてきたエコモー・プロジェクトの大半は、新しい4つのカテゴリーのどこかに分類できます。これまでは普及活動によってサロベツ自然再生活動への理解を深めた人から、次の段階として何をすればよいかという課題がありましたが、エコモー・プロジェクトをカテゴリー分けすることで、サロベツ自然再生において何を目指した活動かが明確になりますので、次にどんな活動に参加すれば良いかということが一目でわかるようになります。このことは、エコモー☆サポーターが個々のエコモー・プロジェクトを支援する上でも、自信をもって取り組みます。

20

なお、エコモー・プロジェクトのカテゴリー分けは、自然再生への寄与度を示すものではありません。それぞれのカテゴリーは、それぞれに大切な役割を持っています。あるひとつのプロジェクトにおいて、複数の視点から見ることができ、その目的によりカテゴリーが変わったり、複数にまたがったりすることも考えられます。厳密に分類する必要はありません。

25

例：地元高校生による修学旅行先での宣伝活動

30 他の地域の人たちにサロベツを知ってもらおう活動でターゲットを訪問先の人にした場合、【カテゴリー1（サロベツに出会う）】に該当する活動にあたります。しかし、参加する高校生が活動に取り組むこと自体をターゲットにすれば【カテゴリー4（サロベツのための行動）】と捉えることもできます。

35

#### （4）エコモー☆サポーター

第3期普及活動計画の担い手です。自然再生事業実施者や地域活動のサポーター役となる行政機関やNPO、一緒に自然再生を進めていこうという個人から構成されます。エコモー☆サポーターは3つの役割があります。

### ①上サロベツ自然再生に対する人々の理解を深める

サロベツを好きな人たちを増やしていくにあたって、上サロベツ自然再生のことを正しく伝えていくことは、とても大切なことです。これまでもエコモー☆パーク（ホッキまつり）やエコモー Day を通じて自然再生を伝えることに努めてきました。これからも自然再生を伝えていくことは、エコモー☆サポーターの大きな役割です。

### ②自然再生に取り組む人や団体をつなげる

一人やひとつの団体だけでできないことでも、いろいろな人が力を合わせることで、成し遂げることが可能になるかもしれません。平成 20 年よりエコモー☆メンバー同士の交流を図るために、エコモー☆交流会をスタートさせました。交流会ではお互いの活動を知ることができ、理解を深め合ってきました。中には、エコモー☆交流会でつながりをもったことがきっかけで、イベント開催に協力してもらおうというような交流も生まれています。

### ③エコモー・プロジェクトの推進を図る

エコモー・プロジェクトの担い手は、個々のエコモー☆メンバーです。これまでエコモー・プロジェクトを推進するため、活動を登録してパンフレットやホームページで紹介したり、広報宣伝の協力、開催場所の提供、連絡先の中継をしたりといった便宜を図り、活動を支援してきました。

なお、エコモー☆サポーターの母体となる自然再生協議会及び再生普及部会は、協議や連絡調整を行う機関であり、エコモー☆サポーターとしてできる活動は限られています。上記の活動は、厳密にはエコモー☆サポーターの活動というよりも、エコモー☆サポーター会議を通じて協議・調整したことに対して、各構成員ができる範囲で協力し合い、全体でひとつの動きをつくってきました。

第 3 期普及行動計画においても、これまで同様にエコモー☆サポーターを核として、個々の構成員の協力によって進めていくこととします。

## 4. その他

### (1) 自然再生普及活動の評価・見直しの仕組み

5 自然再生事業の特徴は、順応的管理です。これは直接的な再生事業に限定されるものではなく、普及活動においても順応的に取り組んでいくことはとても大切なことです。第3期普及行動計画におけるエコモー☆サポーター活動は、順応的に取り組んでいくこととします。

#### 順応的管理の手順

①自然再生の目的を踏まえ、具体的な目標を定めます。

10 ②目標の実現に向けた計画を作成します。

③計画通りに実施します。

④計画通りに実施できたか、目標どおりの成果が得られたかを点検します。

点検のポイントは、単に目標通りできたか否かだけでなく、良かった点、こうすればもっとよくできたのではないかなど、改善すべき点について検討することが重要で

15 ⑤点検結果に基づき、次の計画を立てます。

この順応的管理の方法は、一般社会でも様々な場面で使われていて、品質管理手法である PDCA サイクルとしてよく知られています。第2期普及行動計画においては、この PDCA サイクルが取り入れられていました。しかし、PDCA サイクルでは、言葉が一人歩きしてしまいうまく使いこなせていないことが少なくありません。また、数値目標を立てにくい分野では、適切な評価をするのがむずかしいところがあります。実際、エコモー☆サポーターにおいては十分に使いこなせたとはいえないところがありました。第3期普及行動計画においては、順応的管理の原点に立ち戻り、普及活動の評価に取り入れていくこと

### (2) 様々な人や団体との連携

今回目標として掲げた「サロベツを好きな人を増やす」「サロベツを次の世代に伝える」ということは、自然再生に限らず、「まちづくり」、「観光」、「社会教育」などの分野でも同じことがいえます。第3期行動計画における新しいエコモー・プロジェクトとして、これらの分野の人たちの参加を期待しています。新しいエコモー☆メンバーの参加により活動の幅が広がり、より多くの人たちの参加が得られるようになれば、自然再生のための活動をより一層魅力的に展開することが可能になり、大きな効果を得ることができでしょう。しかし、すべての分野を一元的に推進していくには、それぞれの分野に目配りをする必要があり、多くの人的資源や資金を必要として現実的ではありません。エコモー・プロジェクトとしては、自然再生を軸とした活動を展開し、他の様々な分野でサロベツに対する思いを共有できる人たちと協力・連携し合いながら進めます。